

別の日また同じ公園に内藤が、子供を連れて遊びに来ている

内藤 「ほら一樹、いつも言ってるでしょ、ちゃんと順番守りなさいって……違う違うそのお姉ちゃんはまだもうお家に帰るんだって！ついていっちゃだめ！
なんでお前は女の子の後ばかりついていくかな？
そうそう、ちゃんとネーネーの後ろに並んで……」

内藤、子供達を遊ばせてる。

ヘッドフォンで音楽を聞きながら腰をぐるぐる回す運動をしている
どつやらダンスをしている模様！

内藤、ダンスしながらブツブツ呟いている

内藤 「ヨプロ、ウィー、ヨプロ、ハレー、ヨプロ、ウィー」

内藤 「ほらほら、一樹、また、女の子の方ばかり行って！嫌がってるじゃない……やめなさいって言ってるの！あんまり言つこと書かないならもう帰るよ！」

内藤子供の様子を見ながら真剣に踊っている

そこに、マー君が現れる

マー君 「こんにちはー！」

内藤 「あー、こんにちは……」

マー君 「何やってるんですか？」

内藤 「えっ？あーモムチャンダイエツトです。」

マー君 「モムチャンダイエツトですか？」

内藤 「えー、娘と嫁が今は」しにはまってましてねーなんでもあんまり動きが激しくなくて長く続けられそうだからと言いつい出しましてね、それで、私も例のごとく一緒にやっていると……」

マー君 「へー、いいですね、相変わらずお幸せそうで……」

内藤 「いや、それがちょっと困ったことがありますね……」

マー君 「どうしたんですか？……」

内藤 「長女がですね、その、彼氏を家に連れてきましてね……」

マー君 「いいじゃないですか、大学生なんだから彼氏の一人ぐらいいいないと……」

内藤 「いや、いいんですよ、いいんですけどね、私だって恋愛はどんどんして欲しいと思っ

てますからね。ですけどその連れてきた彼氏っていうのがですね・・・」

マー君 「何か問題があるんですか？」

内藤 「・・・イケメンなんです！なんていうんですか、ジャーニズ系というんですか？ひろっとしていて目鼻立ちがしっかりしていて、いかにも『俺遊んでます』みたいなオラ出しちゃってるんですよ？」

マー君 「ジャーニズ系なんてすごいじゃないですか！娘さんやりますね〜！」

内藤 「どごがすごいんですか？系なだけですから！本当のジャーニズじゃないんですか

ら・・・それに、娘だけならまだしも、妻までですね、彼をみる瞳がうっとりしてるんですよ！」

マー君 「へ〜、きつとそうとう男前なんですな」

内藤 「男前？全然男前じゃないですよ、いいですか？僕らが子供の時の、ジャーニズって言ったらこうなんていうんですか・・・どちらかと言うと、やんちゃな不良系！だけどもんとなく愛嬌があるって感じだったじゃないですか！」

マー君 「そうなんですか？」

内藤 「そうですね・・・なんか色白で全然健康そうじゃない感じで、挨拶だってね、こつ頭下げるだけで、しっかり声出して『こんにちは』って言えないんですよ！」

マー君 「そりゃ、お父さんの前で緊張したんじゃないですか？」

内藤 「緊張？緊張ですか〜！あれが・・・うちの妻にはちゃんと自己紹介するのにはですか？

『どつとも〜タツ君ですっ！』って・・・あー、拓海って名前らしいんですけどね！でも自分のことタツ君ですって自己紹介する奴がいますか？お前はシブがき隊かって突っ込みたくなりますよ！・・・ヤツクン、もっ君、ふっ君、たっ君ってね」

マー君 「すいません・・・」

内藤 「なんで謝るんですか？」

マー君 「いや、僕も自分のことマー君と呼んでください。と言ってしまったので・・・やっ君、もっ君、ふっ君、たっ君、マー君」

内藤 「マー君はいいんですよ、マー君は・・・」

マー君 「は・・・」

内藤 「妻も妻でね、タツ君は痩せてるし、肌も真っ白でどこかの色黒のメタボパパとは大違いだねって！」

マー君 「内藤さんのことですか・・・」

内藤 「そうですね・・・もう頭に来ちゃいますね、絶対に痩せてやろうと思えましたよ！

もうね、モムチャンでもビリーでもなんでも来いって感じですね！」

マー君 「そうなんですか・・・頑張ってくださいね」

内藤 「はい！くそくジャニーズめ」

マー君 「・・・」

内藤 「ところで、マー君の方は、その後どうですか？マリアさんとうまくいってますか？」

マー君 「えー、別れました！？」

内藤 「え？だってまだ3日ぐらいいしか経ってないでしょ？またどうして？」

マー君 「ええ、内藤さんの言った通りでした、どうやら僕は他の人と同じで、ただのお客さん
としか思ってたかったみたいです。」

内藤 「ふむふむ・・・」

マー君 「あの日、内藤さんに言われたことがちょっと気になってましてね、それにお店に行っ
てもあまり相手してくれなかったんで、お店が終わるまで待って、マリアに聞いてみ
たんです。マリアは俺のこと彼氏と思ってるかって？・・・そしたら・・・」

内藤 「そしたら？」

マー君 「こう言われたんです。『えっ？何言ってるの？お店に一度来たぐらいいで彼氏じゃない
でくれる？第一私マー君のことよく知らないし、なんで彼氏なの？私と付き合いたい
ならもっとお金使ってよー！』って・・・それ聞いたら一気に冷めてしまいましたね・・・
他にもたくさん人がいたのに、マリアの周りだけどす黒く、くすんで見えなんです。
きっとマリアには私がお金に見えたんでしょうね」

内藤 「それはまた強烈ですね」

マー君 「はい・・・」

内藤 「でも良かったですね・・・そういう女の子だと早めに気づいて・・・」

マー君 「えー、ありがとうございます。内藤さんがあそこで気づかせてくれなかったら僕ス
ッポリハマっちゃうところでした。」

内藤 「いえいえ、私は別に何にも」

マー君、一度にっこりして、うっむく・・・

内藤その様子を見て

内藤 「ほら、あれですよ、きっとすぐまたできますよ。マー君、誠実そうだしすぐいい人
見つかると思いますよ」

マー君 「えー、そうなんですよ・・・」

内藤 「はい・・・」

マー君 「実は新しい彼女ができたんですよ！」

内藤 「はい？」

マー君 「できたんです・・・彼女が・・・」

内藤 「え〜〜〜？・・・は、は、早いですね？」

マー君 「えー・・・」

内藤 「今度はどちらで出会ったんですか？」

マー君 「マリアと別れてすぐなんですけどね、ちょっと頭冷やそうと思って、公園のベンチで

コーヒー飲んでたんですよ。そしたらどこか遠くの方で女性の『やめてください？』

という声が聞こえたんですね、なんだろうと思ってその声の方に行ってみたらです

ね・・・3人ぐらいの男の人に囲まれてたんですよ・・・」

内藤 「え〜・・・」

マー君 「女性一人が、大人の3人に囲まれてるんですよ？これはただ事じゃないなと思いま

してね、声かけてみたんですよ？どうしたんですか？ってね

内藤 「勇気があるといいますが、怖いもの知らずですね？」

マー君 「えー、私も怖かったんですけどね、小3の時に少林寺やってたんで、気づいたら声か

けちゃってたんです。でも、僕が声かけたら男達すぐ逃げて行きましてね・・・」

内藤 「よかったですね、下手したらマー君が危害に合うところでしたよ。」

マー君 「まーそうなんですけどね・・・やってたんで・・・で、そのあとその女の子とお茶でも

しませんかという流れになりましたね・・・」

内藤 「ほうほう、そこで意気投合してお付き合いするという展開になったわけですね！」

マー君 「はい、そうなんです」

内藤 「なんか、メチャクチャベタですね」

マー君 「ベタ？」

内藤 「はい・・・B級映画みたいな、誰でも想像できそうな、ストーリーですよね。」

マー君 「何言ってるんですか！これ実際にあった話ですからね！内藤さんは、今の話、作り話

だと思ってるんですか？」

内藤 「いや、そういうことじゃなくですわね・・・で、今度はなんてお名前の方なんですか？」

マー君 「ヴェロニカです・・・」

内藤 「ヴェロニカ？？？あの〜、またそういうお店をやってる方なんじゃないか？」

マー君 「違いますよ、そんなに何度も同じ過ちは犯しませんよー！」

内藤 「あっ、すいません・・・では外国の方なんですか？」

マー君 「そうですよー！」

内藤 「あーそうでしたか、ベロニカさんね」

マー君 「ヴェロニカです。」

内藤 「だからベロニカさんでしょ？」

マー君 「ベロニカじゃなくて、ヴェロニカです。」

内藤 「あーヴェロニカさんですね・・・で、そのヴェロニカさんは、やはりスペイン系の方ですか？」

マー君 「そうです、そうです。スペインから語学留学できてましてね。」

内藤 「じゃー学生さんですか？おいかつなんですか？」

マー君 「26歳です。」

内藤 「うんうん、いいですね、まーくん、今幸せでしょー！」

マー君 「あっわかります？」

内藤 「はい、なんか充実してるなって顔に出ていますもん。」

マー君 「はい、充実してます。やっぱり彼女がいるっていいもんですね・・・ですね・・・」

内藤 「こら一樹！勝手に外行っちゃダメだといつも言ってるでしょ！・・・えっ？帰る？
わかったわかったそれじゃ帰ろうか・・・すいません、私お先に失礼します」

マー君 「あーどうも・・・」

内藤 「ベロニカ・・・ヴェロニカさんと仲良くしてくださいね・・・」

マー君 「ありがとうございます。」

内藤、はける

残されたマー君、携帯を取り出してスペイン語の練習を始める。

マー君 「ブエノス・ディアス・・・アディオス・・・ロ・アモー・・・ベサメ・ムーチョ・・・
ベサメ・ムーチョ・・・ベサメ、ベサメ。ベサメ・ムーチョ・・・スペイン語難し
いな・・・」

ゆっくり暗転